

## 遊びのすゝめ

佐久間敦史（大阪教育大学）

コロナ禍での子どもたちへの影響が心配されます。幼児教育施設や学校は、一斉臨時休校をはじめ、さまざまな制限を余儀なくされました。その中で一番大きな問題は、「格差」です。例えば、経済的な事情等でタブレット端末を使う環境が整っていない家庭にも学習を配信する。当然、利益を得る子どもと得られない子どもが出てきます。これでは公教育とは呼べません。むしろ、そうした諸事情のある子どもにこそ手厚い教育を提供するのが公教育です。実際、コロナ禍で、「授業の内容が難しすぎると思う」と答えた小学生は3割、中学生は5割近くにもなります。「授業の進み方が早すぎて、内容がわからない」も、それぞれ2割と3.5割（いずれも概数）です（朝日新聞 2021. 9. 13.）。

さらに、数字では見えないこともあるでしょう。「今後もマスクを外したくない」と言う若者が話題になっています。学校では、特に小学校1年生で、コロナ前とは少し違う子どもたちの様子が見られるようです。例えば、先生が「集まって!」と言ってもなかなか集まらなかったり、「順番に並んでね」と言っても並んで待てなかったりする子が例年より多いと心配する校長先生もいます。もちろん、保護者や幼児教育の先生たち、まして、子どもたちの責任ではありません。コロナ禍での、友だちと関わりにくい環境が影響したのでしょう。

教育の目的は「人格の完成」、中でも幼児期の教育は、「生涯にわたる人格形成の基礎を培う重要なものである」（教育基本法）とされています。その幼児期には、「遊び」が重要です。「人生に必要な知恵はすべて幼稚園の砂場で学んだ」（ロバート・フルガム）と言われるほど、砂場での無限の遊びは、個人の成長や仲間との関わりを育みます。「ごっこ遊び」も同様です。各家庭等で育ってきた子どもたちは、それぞれに自分の世界を持っています。ところが、ごっこ遊びでは、その幼い「常識」が揺さぶられます。例えば「ままごと」で、お父さん役をやりたい子どもと、お母さん役をやりたい子どもがいるとしましょう。次に、「私はお父さんだから、早速、料理を始めるよ!」と言い出したとします。すると、「いや、料理はお母さんがするものだから、私がする!」ともめだします。こうして、それぞれの子どもは、「お母さん（お父さん）が料理をする家もあるんだ!」と学びます。

子どもたちが、「違い」に触れることで成長につながる重要な「遊び」を、精一杯させてあげたいと願います。